

## 【入選】

## キラールホエールとリベンジヤーク

経済学部 現代ビジネス学科4年 濱口将吾

鯨

この海は俺たちの楽園だった。

……『奴ら』が来るまでは。

「チクショウ……」

海底に沈む同胞の亡骸を見て、俺は一人呟く。

腹部を奇麗に引き裂かれ、内臓を奪われ絶命している。そいつの顔は、無念そうに歪んでいた。

間違いない。

この手口は『奴ら』のものだ。『奴ら』は、俺たちの肝臓しか食べない。美食家を気取っているのだ。

本当は、ただ俺たちを殺すのを楽しんでいるだけのくせに。

俺たちの命を玩具みたいに扱いやがって。

「ここにいたのか」

そこへ一匹の仲間がやってきた。

共にこの海で生まれ、これまで一緒に生きてきた同胞だ。

「見てみるよ」

俺は、亡骸をヒレで指し示す。

「……酷いな」仲間は、吐き捨てるように言う。

「また、やられたのか」

「ああ……」

「『奴ら』は化け物だ」忌々しげに、仲間は亡骸に近付いていく。「奴らが来てから、一体どれだけの同胞が殺されてきた？ 抵抗することも出来ずに、呆気なくよ。……もう、限界だ」

「あ？」

「オレは、この海を出る」

仲間は、亡骸の顔に齧り付く。

俺も、その近くを囁んだ。俺たち流の弔いだっ

た。同胞の肉を、よく噛み締め、飲み込む。

そして、言った。

「……なに言ってるやがる。逃げるってのか？」

「この海にいたら、『奴ら』に殺されるのは、時間の問題じゃねえか」

苦魚を噛み潰したような顔で言う。俺は、どうしても、そいつの言うことに納得することは出来なかった。

「ここは、俺たちの海だ」同胞の血が、海中へと円状に広がっていく。「どうして、他所者が暴れ

たせいで、最初から居た俺たちのほうが追い出されなきゃならないんだ」

「んなことは分かっているよ……オレだって悔しい。悔しいに決まってるだろう」

「だったら——」

「敵わねえんだよ、『奴ら』には！」

悲痛な面持ちで、仲間は叫んだ。

「この海は、ああ、確かにオレたちの故郷だ。捨てないで済むなら捨てたくない。でも、オレは何より命が惜しいんだ。『奴ら』に食われて、こんな惨めな死に方するのは——」

——俺はゴメンだ。

仲間は、そう言っ、同胞の亡骸の最後の一口を飲み込んだ。

「……お前」

何も、言い返すことは出来なかった。

その時だった。

遠くの方から、悍ましい気配を感じる。

殺意と邪気に満ちた、禍々しい海流が俺たちの感覚器官に届く。

大きな何かが近づいてくる気配を、感じ取っていた。

「まずい。『奴ら』だ」

俺たち種族は視力があまり良くない。その分、顔の先にある感覚器官を研ぎ澄まして、危険を察知したり、獲物を捕らえたりする。

——そう。少し前までは、これらの機能を使って、この海の頂点捕食者として君臨していたのは俺たちだったのだ。

「逃げるぞ——」

仲間と言われ、俺も背ビレを返しその場を離れる。

その直前、俺は『見た』。目では無く、感覚で。この海全ての闇を凝縮したような、二頭の黒い巨体。その体にはまばらに白い模様があり、闇を切り取ったようなその輝きが不気味さを倍増させる。

そして特徴的な、それぞれが左右に大きくひん曲がった背びれ。

『奴ら』は、明確に、俺たちを殺そうという意思を持って、こちらへ向かってきていた。

俺と仲間は、全力で逃げる。

「なあ、おい」

全速力で隣を泳ぐ仲間に、俺は言った。

「何だよ？」

「俺は、嫌だぜ」

「あ？」

「尾ビレ巻いて逃げ出すの、嫌だ。俺は、なんとかしてこの故郷を守りたい」

「何……言ってるんだよ」

俺は、泳ぎながら決意を抱えていた。

このままじゃ、俺はただの負け組だ。『奴ら』という脅威にビクビク震えながら生きていくなんて、そんなみつともない真似、俺はしたくない。だから、俺は決めたのだ。

——俺は、『奴ら』と闘う。

人

「この海はサメたちの楽園でした。

……『彼ら』が来るまでは」

南アフリカ大学の研究員・アーノルド氏が、広大な海を見つめながら、そう言った。禿頭で、体格の良い五〇代くらいの紳士である。

「彼ら……？」

「シャチですよ」アーノルド氏は言う。「ある二頭のシャチが、数年前この海岸にやって来て、たった二頭で数多くのホホジロサメを惨殺し始めました」

深刻そうな表情。私は、海についても海洋生物についても、全くと言っていいほど知識を持ち合わせてはいないが、ただならぬことが起きているというのは、彼の様子から察することが出来た。

彼とは、先日近くのバーで知り合った。

私は、バカンス制度を利用して、この南アフリカでの観光を楽しんでいるところである。アーノルド氏は、大学で主に、ホホジロサメの生態につ

いて研究しているらしく、この海のことについて色々教えて貰っていたのだ。

「シャチがサメを襲うんですか？ そりゃあ、驚いた。知らなかった」

「海で最強のハンターと言ったら、それは間違いなく、シャチです。なにせ彼らは、あのシロナガスクジラでさえ襲うことがある動物です。サメは獐猛で恐ろしいイメージがあるでしょうが、実はそこまで強い訳ではありません」綺麗に整えられた顎鬚を撫でる。「そもそも骨格からして、軟骨魚類であるサメは、哺乳類のシャチに体当たりされただけでも、ひとたまりもありませんからね。……ただ」

「何です？」

「この海域のシャチは少々レベルが違う」

これを、見てください——とアーノルド氏はスマートフォンを操作し、一枚の画像を見せてきた。

「おお……ッ」

サメの死骸。少々ショッキングだった。海岸に打ち上げられ絶命している。その腹部は、まるで外科手術でもしたみたいに、スパッと斬れていた。

「その、シャチのコンビの作業です。彼らはホホジロサメの肝臓だけを、器用に取り出して食べます。シャチは気に入った餌だけを繰り返し狙う習性がある。サメの身体の肉は特有のアンモニア臭がしますからね。肝臓の方が味もよく、栄養素も豊富なんです」

「好き嫌いは感心しないなあ」

アーノルド氏はスマートフォンをポケットにし

まう。

「二頭のシヤチは、地元住民から『右舷』『スターボード』『左舷』『ポート』と呼ばれています。それぞれ、背びれが右と左に曲がっているという特徴があるからです」

「まるでコミックのキャラクターだ」

「ええ、まさしく。現実の存在とは思えません」

アーノルド氏は、掌をバチンと額に押し付ける。「通常、シヤチと言うのは五から三〇頭の群れを形成します。あれほど少数で、そしてあれほどスマートに獲物を捕らえるシヤチなんて、他に聞いたことが無い」

「クールな奴らですね……おっと、失礼」

サメの研究者の前で、サメの天敵を褒めるのはどうかと思ったのだ。

「構いませんよ。とにかく彼ら、右舷と左舷のせいで、この海岸に——サメたちの楽園だったこの海のサメは数が激減しています。まだ襲われていないサメも、彼らを恐れてここには寄り付かなくなっている。たった二頭の、殺し屋のおかげで、この海は大変なことになっている」

「大変？ サメがいなくなったら、それほど問題なんですか？」

私は有名なハリウッド映画を思い出していた。狂暴なサメが人間を襲う映画を。アーノルド氏の言うように、あれは映画の誇張表現なのだろうが、それでも実際のサメも危険なこと変わりはないだろう。そのサメが減ることで、それほど困ると思えなかった。

「ええ、大問題ですよ」アーノルド氏は頷く。「生態系は、バランスが重要なんです。たとえば、ホジロザメがいなければ、その獲物であるミナミアフリカオットセイの行動が制限されず、絶滅の危機に瀕しているケープペンギンを捕食する機会が増えてしまう、とかね。ある一種の生物に変化が生じることで、広範な生態系に影響を及ぼす恐れがあります」

「なるほどね——ありがとう、勉強になりましたよ」

「大変な事態が起こっているのは間違いないが——」

「この海は、綺麗でしょう？ 私は、この海岸が好きだ。すべての生物が幸せに暮らせる海を、私は願っているんです」

その眼差しは真剣だった。口先だけの言葉じゃない。彼は、サメを——そしてこの海を愛しているんだらう。それが、ひしひしと感じられた。

私は、アーノルド氏と、堅い握手を交わす。その後、アーノルド氏は仕事があると帰って行った。

一人になった私はしばらく、港から海を眺めていた。ああ、なるほど。彼の言う通り実に綺麗な海だった。

それにしても。

——凄腕の、殺し屋コンビ『右舷』『左舷』か。彼らの存在は、サメにとっては堪ったものではないのだから。それは分かる。生態系を壊しかね

ない異常個体であることも。

だが、どうしても、私はこう考えてしまう。なんて——

「なんて、格好いいんだらう」

### 鯨

なんて、惨めなんだらう。今の俺は。

俺は、遠く離れた岩陰に隠れて、その様子を観察していた。それしか、出来る事が無かった。

黒光りする二頭の化物が——『奴ら』が、同胞を襲っている。

その決定的な瞬間に、俺は出くわしてしまった。同胞は、必死に抵抗しようとしている。だが、無理だ。『奴ら』とは体格差が大き過ぎる。パワーも桁違い。同胞を中心に二頭はぐるぐると周回し、取り囲んで逃がさない。

——助けに行きたい。同胞がむぎむぎやられるところを見たくない。

でも、情けないことにヒレが疎んで動けない。くそ。なんて、惨めなんだ。

やがて、ヒレが左に曲がっている方が、同胞に勢いよく体当たりする。あれだけで、俺たちの脆い身体は耐えられない。動けなくなったところを、右曲がりの方が腹に噛みつく。そしてあっけなく、腹の肉は右曲がりによって引き千切られ、その中身をすぐに食られてしまう。

ああ……。ああ、畜生。

あつという間に、同胞の内臓を食べ終わった『奴ら』は、どこかへと泳ぎ去って行った。

俺は、『奴ら』が完全にいなくなったのを確認してから、海中に漂う亡骸の元へと向かう。

「……っ！」

その、悲痛に歪んだ表情を見て、俺は思わず言葉失くす。

それは、先日、この海を出ると言っていた、あの仲間だった。

どうして、まだ、この海にいるんだよ。

闘うと決めたはずの俺が『奴ら』から逃げて、逃げると思ったはずのこいつは『奴ら』に殺された。

どうして……こんなことになった。

俺は、俺たちのやり方で、こいつの亡骸を吊つてやる。

仲間の血の味を、しっかりと体中に沁み込ませるように、噛み締める。

そして、俺は、改めて決意した。

——やはり、ここは俺たちの海だ。

俺と、こいつが——愛した楽園だった。

あの、クソ化け物に荒らされて、黙っていて堪るか。

待つてる——俺は、腹の中で、ここで死んでい

た仲間告げる。

俺は、刺し違えてでも、『奴ら』を殺す。

無惨にも、命を弄ばれるように死んでいった同胞たちの仇を取るために。俺は、『奴ら』に立ち向かう。今度は、もう、ビビらない。

※

『奴ら』に立ち向かうにあたって、一つ気が付いたことがあった。

『奴ら』は常に、二頭一緒に居る。狩りの時、脅威になるのはそのコンビネーションだ。先ほど、仲間を殺した様子を見ていたが、右曲がりの攻撃を躲したら左曲がりが迫り、左曲がりを躲したら右曲がりが——と言った具合に、『奴ら』はコンビであることを最大限に活かし、俺たちを襲ってくる。

——で、あるならば、だ。

『奴ら』が、バラバラにいるときに立ち向かえば、それほど恐ろしい存在では無いんじゃないだろうか。

それが、俺の考えた作戦だ。

シンプルな作戦ではあるが、二頭が協力するという脅威を取り除けるだけでも、充分勝算はあるだろう。『奴ら』のどちらかが一頭でいるときに背後から忍び寄り、奇襲をかける。例えば、最初にどこかのヒレでも噛み切つてやれば、泳ぐ力を削ぐことは出来るだろう。体格やパワーでは敵わなくても、俺たち自慢の歯だけは、そこまで負けているとは思っていないのだ。

例えばそれで殺しきることが出来なくとも、コンビの片方に深手を負わせることさえできれば、今までほど圧倒的な脅威では無くなる。

もちろん、二頭とも殺しきることが出来るのが一番だが、『奴ら』に一矢報いることが最大の目

標なのである。

俺は、自分が絞り出した名案の完璧さに、思わず震いした。

……が、すぐに、この作戦の欠陥に気が付く。

『奴ら』がバラバラにいる時なんてあるのだろうか。『奴ら』を見かける時は、常に二頭一緒だった。別々の時なんて見た記憶が無い。

じゃあ、どうするか。俺が自ら、『奴ら』を分断する？

いや、無理だろう。その前に殺されるのがオチだ。

俺は、その後も頭を捻り続けた。本来、俺は難しいことを考えるのが得意ではない。と言うか、この海で育った同胞たちは皆そうだ。穏やかな場所だから、大らかな性格の者が多い。

でも、『奴ら』を倒すためにはそんな悠長なこととは言ってられない。

結局、この作戦は『奴ら』を監視し、バラバラになる瞬間を待ち続ける、そのチャンスが来たら、一気に蹴りをつけるという方針で行くことにした。

我ながら、行き当たりばったりな作戦だとは思

う。しかし、信じられないことに、チャンスは意外にも早く訪れた。

※

作戦を開始してからしばらく経ったある時。

右曲がり、一頭で泳いでいるのを発見したのだ。

「おいおい……」

俺は思わず、独り言つ。

「……嘘だろう」

俺の視線の少し先を悠々と泳いでいる右曲がり、俺に気が付いた様子も無く、呑気な様子でヒレを動かしていた。

辺りを探ってみても、少なくとも感じ取れる範囲には左曲がりがない。

突如沸いてきた、千載一遇のチャンスだった。

状況が呑み込めるにつれて、メラメラと闘気が滾ってくる。この海水の全てが沸騰しているみたいだ。

俺の脳裏には、これまでに見た同胞たちの亡骸が浮かんでいた。

腹だけをスパッと切り裂かれて、無惨にも沈められた哀れな亡骸。

何も、俺たちを食べること自体を恨んでいる訳では無いのだ。

化け物じみても、『奴ら』だって生き物だ。俺たちと同じ。他の生き物を喰わなければ生きていけない。それは分かっている。

俺が、気に入らないのは、その食べ方だ。

内臓だけ。内臓だけを食べる為に、『奴ら』は俺たちを殺しまくった。まるで、その狩り自体を楽しんでいるみたいに、不必要に多くの同胞たちを。

それは——俺たちの命に対する、侮辱なのだ。

俺は、それが許せない。

圧倒的な力で、俺たちを踏み躪って来た『奴ら』。一筋でも、傷をつけてやらないと、死んだ同胞たちに合わせる顔が無い。

——『奴ら』は怖い。

怖い、俺がやらねばならないことだ。

俺は、少しずつ、右曲がりとの距離を詰めていく。

怖い。怖いけど、いま目の前にいるのは『奴ら』では無い。『奴』だ。たった一頭なら、怖くない。

——俺は自分にそう言い聞かせる。

この間は、共に生きてきた仲間が殺されるのを、ヒレを啜えて見ていることしか出来なかった。

だから、今度こそ！

今度こそ、俺たちの意地ってもんを見せつけてやるのだ。

少しずつ、少しずつ『奴』との距離が縮んでいく。まだ、気が付いていないようだ。気が付かれる前に、尾びれを噛み千切ってやる。

不意に、右曲がりの動きが、止まる。

そして、方向転換をしこちらを振り向こうとしているのが、分かった。

——だが、もう、遅い。

今だ！

心のなかで叫ぶ。俺は、口を大きく開け、『奴』

に向かつて突進する。

反撃の暇は与えない。一直線に立ち向かい、噛みついてやる。

——皆、見ていてくれ。

同胞たちよ。仲間よ。俺の雄姿を見ていて欲しい。この命を散らしてでも、俺は『奴』に復讐をしてやる。

今まさに、俺の鋭い歯が、右曲がりの尾びれに食い込もうとしていた。

### 鯨

この海は我々の楽園だ。

右舷は、独白する。

食料の気配につられ、たまたま辿り着いたこの海域。そこには、自分たちの食料となる生き物が豊富に暮らしていて、これまで幾度と無く死線をくぐり抜けてきた右舷と左舷にとつて、この海は食うに困らない楽園だった。

だが、同時にこうも考えていた。

——それが、どうしたと言うのだ。生ぬるい。自分より弱い生き物を、左舷とともに狩り尽くしたところで退屈だけじゃないか。

右舷は、自らの、異常さに自覚的だった。

シヤチは普通、群れを作って集団で狩りをする。母系社会であるシヤチの、その集団のリーダーは経験豊富な雌だ。出産期を終え、年齢を重ねた雌は、若いシヤチに良い餌場や、効率的な獲物の捕り方を伝授する。

かつては右舷と、血縁関係にある左舷も、その例外に洩れず、雌が率いる群れの中にいた。

彼らが入った集団では、七頭ほどの仲間と協力し、主にニシンなどの小魚を追い込み捕食する。ニシンがいる場所は、リーダーが長年の経験から割り出していた。

その頃の生活は、決して苦痛に満ちたものでは無かった。コンスタントに食事は出来たし、仲間とのコミュニケーションも上手くいつていた。

だが、右舷はそんな生活に満足出来なかったのである。

右舷は、時折どうしようもなく自分の血が昂るのを感じていた。

何故だかは分からない。ただ、その衝動に突き動かされそうになるのを必死で抑え込んでいた。

もっとヒリ付く暮らしがしたい。刺激が欲しい。予定調和みたいな生き方にはうんざりだった。

そのことを左舷に打ち明けたところ、彼は、予想外なことに賛同してくれた。

お互い、生まれつき背びれが曲がっていることで親近感があったのだが、同じ生き方を選択するほどとは思っていなかった為、驚くこととなった。

そして、右舷と左舷は、群れを離れることを決意する。

右舷と左舷がリーダーに群れを離反することを申し出た時、当然ながら反対された。群れのリーダーは、彼らの祖母だった。シヤチは、仲間を大切ににする。群れのチームワークが狩りにおいては最も重要なのだ。

そんなことは分かっていた。

分かっていたが、抑えられない衝動だった。

結局、右舷と左舷は、仲間たちの制止を振り切る形で群れを離れることとなった。

それからの生活は——右舷にとつては刺激的だった。

いくら、シヤチが最強の捕食者であるとは言っても、海は絶対安全な場所では無い。時には様々な危機に見舞われたが、その度にか切り抜けてきた。

右舷と左舷の身体には次々生傷が刻まれていったが、同時にこの海で生きていく術も身につけていった。安心なんて無いが、満たされた日々だった。

やがて、右舷と左舷は近くの海で恐れるものがないほど強いコンビとなっていた。

そして、今。

右舷は、思い悩んでいた。

我々は強くなってしまった。この海岸は、理想的な狩場である。だが、だか

らこそ、刺激に欠ける。左舷と共に狩りをして失敗することはほとんど無い。安定して、好物のサメの肝臓を喰うことが出来る。

だからこそ、つまらないのだ。

右舷は、自分のこの刺激を追い求める気質が特異なものであるとは気が付いていた。何故、自分はこの生き方をしているのだろうか。

狩りは楽しい。

群れに居た頃とは違う、刺激がある。

だが、サメと自分たちの間には強さに明らか違いがあつて、呆気なく狩りは終わってしまう。

——虚しい。

右舷はそう感じていたが、左舷は、この狩場を気に入っているようだった。こんなにもたくさんサメの肝臓が食える場所は他には無い、と。

左舷は、元々自分についてきてくれただけ。コンビになつてくれただけ。

右舷のように、刺激を求めてしまう衝動を抱えながら生きている訳では無いのだ。

最近、二頭の間の考えのギャップが気になることが増え、共に過ごさない時間も増えてきた。

今、この時もこうして、新たな刺激が無いか探しながら一頭で海を泳ぎ続けていた。

が、刺激なんてものは、この穏やかな海にはそうそう無い。分かっているけれど、右舷はそれを理解するたびに落ち込んでしまうのだ。

——と、その時だった。

久しぶりに——本当に久方ぶりに全身を包み込むようなピリツとした感覚。

刺激的な、何かが、迫ってくる気配。右舷は、思わず動きを止める。

後ろから、何かが迫って来ていた。

自分の尾びれを何者かが狙ってきている、そんな気配を敏感に察知する。

振り返ると、一匹のサメが、自分の尾びれに噛みつこうと突進してきていた。

今現在、周りに左舷はいない。自分は一人。これは、一対一の戦い。

瞬間、全身の血が滾るような高揚感に包まれる。

——刺激的、予感がした。

人

「信じられないことが起こりました」

数日振りに、アーノルド氏と再会する。

私は、先日彼に海や海洋生物のことについて教わって以来、海に魅力を感じ、毎日このビーチで海を眺めて過ごすようになっていた。

そんな私の元へ、研究の休憩中だというアーノルド氏がやって来たのだ。

「どうしたんです？」

彼の顔は、高揚感からか赤らんでいる。彼をここまで興奮させる出来事とは何だろうか、と私は興味をそそられた。

「右舷が、単独でサメを仕留めたんです」

アーノルド氏は言う。

「単独……左舷の手を借りずに、つてことですか？」

「ええ。信じられないことです。私の専門分野は、サメの研究ではありますが、それでも、驚くべきことなのは分かります」

「……浅学で申し訳ないが、私にはいまいち凄さが分からないな」私は、肩をすくめる。「つまり、どんなふうにするんです？」

「シャチが単独で、サメのような大型の獲物を狩るのが確認されたのは世界で初めてのことなんです」

「世界初？」

「ええ。以前も言いましたが、シャチは群れで狩りをするのが普通なんです。それなのに、右舷は、たった一頭での狩りを成功させてしまった。サメの研究員である私が、こんなことを言うのもおかしい話ですが——彼は偉大なる怪物です」

「……あるいは、凄腕の殺し屋、つてところか」

「とにかく、単独での狩りが観測されたことで、これまでのシャチ研究における常識が変わるかもしれません」

なるほど、たしかに、凄いことなのだろう。

ようやく、私にもその衝撃が伝わって来た。

アーノルド氏はそれを私に報告すると、研究へと戻っていった。まさかとは思いますが、私にそのことを伝える為だけに来たのだろうか。

私は、また、海を眺め始める。

海は、良い。

この一面に広がる景色の中に、一体どれほどの命が溢れているのだろうか。

シャチも、サメも。捕食者も被捕食者も。皆、大自然の中で懸命に生きている。

そのことに思いを馳せると、私はその雄大さに身震いしそうだった。

と、その時。

海岸線に、何かが打ちあがっているのが見えた。何か、大きくて灰色っぽい物体が、そこに落ちていた。

「……まさか」

私は、その物体のすぐそばまで駆けていく。

「わお……！」

それは、予想した通り、ホホジロサメの死骸であった。腹部には、スパッと一直線の切れ込みがある。

恐らく、右舷が左舷にやられたものだろう。

サメの死骸を発見した場合、どうしたら良いのだろうか。とりあえず、アーノルド氏を呼んでくれれば良いのだろうか。

と、その前に。

その死骸の、顔の方を覗き込む。口にはびつしりと鋭く尖った歯が揃っていて、死んでいるのは分かっただけでも恐怖を覚えるくらいだった。

そして、表情。

こうして見ると、サメと言うのはつぶらな瞳をしていてけっこうチャーミングである。私には、もちろん、サメの感情を読み取ることなど出来ない

い……苦痛に歪んでいるようにも、諦念を顔に浮かべているようにも、恐怖を感じているようにも、見ようによってはどうとでも見える。

このサメくんは、一体、どんな思いで右舷、あるいは左舷に襲われたのだろうか。

そう、考えてしまう。

いや、大自然を必死で生きた生き物の想いを、私たちが勝手に想像してしまうのもなかなか品の無い話だ。やめにしておこう。

サメの死骸に向けて、私は軽く祈りを捧げる。

心の中で、彼のことを悼みながら。

そして、アーノルド氏を呼びに行く為、踵を返した。

……ただ、なんだろうか。

私は、走りながら、先ほどのサメくんの姿を思い浮かべる。

まあ、きつと気のせいなのだろうが、このサメくんの顔を、表情を見た時。

不思議と、何か一仕事終えたような、してやったりと言う達成感や満足感を顔に浮かべているように見えたのは――

私の思い違いなのだろうか。

コメント

私は海に浪漫を感じます。

そして、多種多様なこの世界の生き物たちにも、浪漫と敬意を覚えます。そんな思いを込めてこの作品を書いたつもりですが、いかがだったでしょうか。

前々からとても心惹かれていたシャチの『右舷と左舷』というモチーフをやっと、作品に登場させることが出来て、感無量です。こんなに格好いい動物が現実には居るんだ、と初めて彼らのことを知った衝撃を作品に仕立てることが出来ていたら嬉しいですね。

ただ、作中では、シャチが悪者であるように書いてしまった気がしますが、実際のところシャチの行動パターンが変わった背景には人間によるサメの乱獲などの原因もあるそうです。自然や野生動物の中には、善も悪も無いのだと思います。

また、サメやシャチや、生物学などに詳しい人がもしもこの作品を読んで「ん？」と首を傾げるような部分や、「出鱈目だろ」とツツコミを入れたくなる部分があった時は、私の力不足か作品の為に創作を加えた部分だと思えますので、温かい目で読んでいただけると助かります（なるべく調べて、事実に出来る限り即して書いてつもりですが）。

最後に。読んでいただいて本当にありがとうございます。